

平戸藩における山鹿流兵学の受容過程 —問題提起と研究方法—

ドブヴェリー・フロラン*

はじめに

修士論文において、報告者は山鹿素行の兵学思想を分析し、解釈した。博士論文では、平戸藩における山鹿流兵学の受容・普及・影響等を考察し、近世思想史・学問史・兵学史の中に位置付けることを目指している。本報告では、その研究の初歩を紹介する。

1. 再検討すべき江戸時代の兵学：山鹿流の場合

a) 兵学¹とは

日本における兵学の概念と知識は、八世紀に古代中国から伝来した。古代中国において、「兵法」とは軍学を指しており、日本に伝来した兵学は武経七書²に基づくものである。戦争自体に焦点を置いている欧米の兵書に比べ、中国の兵書の一つの特質は、戦争を国家の統治に不可欠で、自然な要素として見なすところにある³。時間が経つにつれて、日本の兵学は陰陽五行、天文、雲煙気と八卦に基づく占いと、日本の神話や軍記物という様々な要素から影響を受け、徐々に変化し、不可思議で呪術的な分野となった。日本兵学には、義経流や楠木流のように、いくつかの流派があり、中世の合戦において重要な役割を果たした。十七世紀に騒乱の世が終わると、兵学はそれまでの形を変え、六〇以上もの流派が創設されたほどの目覚ましい発展を遂げた。江戸時代以前は、流派の教えは理論化されておらず、実践において無限に変化したが、江戸時代以後、流派の教えは理論化・

明文化されていったのである。そうした流派は主に五つあり、山鹿素行(一六二二～一六八四)によって創設された山鹿流はその一つである。

b) 山鹿素行と山鹿流

素行は会津藩の武士の子として生まれ、五歳の時に家族と共に江戸へ移った。六歳から武経七書と四書六経を読み始め、その二年後、江戸時代初期に有名な儒者であった林羅山(一五八三～一六五七)の門弟となった。素行は羅山の下で才能を認められるようになり、後に名匠の下で当時の五つの主な分野を学んだ。そのうちの 하나가兵学であり、甲州流の創設者である小幡景憲と北条流の創設者である北条氏長の指導を受け、後に、兵学者として出世した。幕府の士官を志していたが、九年間の禄仕を除けば、浪人として生涯を送った。

素行はその生涯において著書を著し続け、自らの思想をとどまることなく深化させた。山鹿流に見られる特徴は以下のように要約できる。兵学とは武士に向けた学問である。武士には、社会を悪人から保護することと、国民を撫育することという二つの役割があるため、兵学も戦争＝武のみならず、社会の統治＝文の両面を含む学問でなければならない。そして、戦争も民の統治も、根本的に同様なものであり、自然の法則に従い、臨機応変を以って行うものである。

素行は山鹿流を通じて、戦争に関する学問を、武士の役割と社会の構造とに密接に結びつけようとした。そのため、山鹿流は武士社会において多大な人気を得、武士の思想に重要な影響を与えた。

* パリ・ディドロ第七大学、一橋大学

山鹿流流祖として、素行は門弟を一〇〇〇人余り有し、その中には幕府の家臣や大名も多かった。素行は、ほとんどの時間を江戸で過ごし、武士の指導に当たったが、参勤交代等の影響で、国中から江戸へ武士が集まっていたため、その教えは国中に普及した。十九世紀まで残った数流派の中には、主に二つの流れがあり、その一つは、肥前国平戸藩の学統である。

c) 何故山鹿流を研究するか

平戸藩における山鹿流について言及する前に、その研究の必要性について話したい。兵学の研究に携わった主な学者は、石岡久夫氏である。一九五〇年代から七〇年代にかけて出版された著書⁴で、石岡氏は兵学諸流に関する基礎知識を整理し、明らかにした。石岡氏以外には、兵学はあまり研究されてこなかった。戦後軽視される傾向のあった兵学研究は、近年様々な側面から研究がなされ、その価値が見直されてきた。こうした再評価の過程に携わった研究者は、日本近世史研究において、兵学が重要な分野であると指摘してきた。

山鹿流の研究に関しては、二〇一二年度の谷口眞子氏論文である「津軽藩における山鹿流兵学の受容—十七世紀後半の軍事—」がその新しい研究動向の好例である。その論文において、谷口氏は、素行の弟子であった武士達の津軽藩藩士としての大規模雇用や、山鹿流が藩政（軍制）に与えた影響を明らかにした。津軽藩は、平戸藩に次いで山鹿流の主な学統であったが、後者に関する研究は現在積極的に行われておらず、ほとんど未知のテーマだと言える。

報告者が平戸藩と山鹿流に関する史料が残存しているか否かを調べたところ、その史料は豊富にあり、容易に閲覧できることが分かった。それらの史料は主に二箇所所に所蔵されている。一つは平戸市の松浦史料博物館であり、松浦家関係の古文書や書物を管理している。もう一つは「素行文庫」という山鹿本家の所蔵していた史料群であるが、

数年前に平戸市から立川市にある国文学研究資料館に移され、最近閲覧が許可されたばかりという状況である。「素行文庫」の史料が容易に使用可能になったことと、近世史学における兵学の価値の再評価がなされている現状から、今はまさに平戸藩における山鹿流兵学の研究を行う好期だと、報告者は確信している。

2. 江戸から平戸へ：山鹿流の受容過程

a) 平戸藩の特徴

平戸藩は長崎に近く、南蛮船渡来に備えて国境を防御するよう幕府に命じられており、軍制において、江戸時代を通じて特別な位置を占めた藩であった。また、国際交流と貿易上においても固有な歴史を持つ藩であった。一六〇九年オランダ船が渡来し、平戸に商館が設立され、一六一三年イギリスも同様に商館を設立した。しかし、後者は一六二三年に閉鎖され、前者は一六四一年に平戸から長崎へ移転された。なお、海外に対してのみならず、キリシタン問題で藩内・国内においても潜在的緊張感が存在した藩であった。

平戸藩の統治は、戦国時代を勝ち抜いた平戸松浦家が行っていた。江戸初期に、松浦家は新家臣を召し抱え、特に四代藩主松浦鎮信（一六二二～一七〇三）が大規模に新しい人材を求め、雇用了。そして、その新参登用家臣が藩政中枢へ進出したとされている⁵。

ところで、鎮信は素行と初めて出会った平戸藩藩主であり、二人の友情があったからこそ、平戸藩山鹿流・山鹿本家ができたと言えよう。

軍事、国際関係上豊かな歴史を持つ平戸藩において、山鹿流はいかなる位置を占めたか。その受容過程を明らかにするべく、現在、松浦鎮信・平戸藩藩士と素行との交流と、山鹿流の門弟に焦点を当てて調査を行っている。

b) 平戸藩と素行との交流

素行の日記とも呼べる『年譜』⁶によれば、松浦鎮信と素行が初会したのは、一六五二年十一月、江戸の板倉重矩亭にてであった。下野国烏山藩藩主板倉重矩（一六一七～一六三七）は、素行と鎮信を含めた数人を招待し、素行はそこで荘子の斉物論を講じた。翌月、素行は松浦鎮信亭にて鎮信と、北条流の創立者であり、素行の師匠であった北条氏長と会った。兵学や兵学指導の話をしたのではないかと。素行に宛てた鎮信の書簡によれば、鎮信は氏長の指導より素行の指導を求めたことが窺える⁷。鎮信は一六五六年に素行の弟義行を召し抱え、一六八〇年に家老職に昇進させた⁸。そして、素行の嫡男高基も鎮信に召し抱えられ、家老の職に付き、平戸藩における山鹿本家の祖先となった。『年譜』には、高基の平戸藩藩士との交流、また素行と松浦鎮信の嫡男棟と次男織部との交流も見られる。特に松浦棟の山鹿流兵学への関心は父鎮信に劣らず、棟は山鹿流兵学の奥義である「大事」をも伝授された⁹。

『年譜』と書簡には、素行と松浦家との交流に加え、平戸藩家臣との交流もよく窺える。確認できた九人の中には、家老が四人もあり、他の三人は高禄の家臣である¹⁰。彼らの家臣は頻繁に素行と会い、兵学に関する話や訓練を行っていた。また、素行は平戸藩藩臣の数人と文通しており、同藩の藩政に関する情報を得たり、自分の意見を主張したりしていたようである¹¹。

c) 十八・十九世紀の発展

以上のように、江戸初期の平戸藩における山鹿流の受容過程はまだ十分に検討していない。これは今後の課題の一つとして一旦置いておき、十八・十九世紀の山鹿流の発展について触れたい。

先行研究からすでに分かる二つの重要な節目は、積徳堂の移転と藩校の設立である。前者の積徳堂とは、素行が江戸に設立した私塾であり、一七四五年に在平戸藩山鹿本家屋敷に移転され、幕末まで同藩において山鹿流の伝授の一つの要であった

とされている。後者の藩校は、一七七九年に藩主松浦静山に設立され、それ以来、山鹿流は平戸藩公式の兵学流派の一つになり、同藩においても、在江戸藩校においても積極的に教えられた¹²。

今まで、報告者は主に山鹿流の門弟に焦点を当てて調べてきた。松浦史料博物館と「素行文庫」の史料—兵書、起請文、伝書等—から分かったことは、以下のとおりである。まずは、一七八〇年から一八六二年までの間に門弟であった三人を特定した。次に、その三人の内、奥村幽然親愛が山鹿流の奥義を門弟に伝授したことと、山鹿家の人物に加え、種村要人が起請文の受取人として挙げられていることを確認した¹³。要するに、藩内には、山鹿流を伝授する権利は、山鹿家のみならず、他の家にもあったということが分かった。最後に、兵書の普及については、門弟間と、門弟と山鹿家の間で、兵書の借用と書写が行われていたことが分かった¹⁴。

結びにかえて・今後の課題

本報告では、平戸藩における山鹿流兵学の受容・普及・影響等の研究初歩を紹介した。先行研究が乏しいため、研究の余地が非常にある。報告者は、山鹿素行と平戸藩との関係、そして同藩における山鹿流の受容過程から調べる必要があると考えている。現時点では、素行と松浦家・家臣との友好関係や、平戸藩の山鹿本家と分家の定着過程を部分的に明らかにした。これらをより詳細に調べることが、今後の一つの課題である。

また、江戸時代中・後期における平戸藩の山鹿流の発展を垣間見ることができた。伝授過程や兵書の普及過程を明らかにすることは、当研究において不可欠だと考えており、これをもう一つの課題としたい。

註

¹兵法とも。意味・使用の分別を簡単に説明すると、「兵法」は江戸時代以前の実践向きの知識を指しているのに対し、「兵学」・「兵法学」は山鹿流を含め、江戸時代以降の学問体系を取った知識を指している。便宜上、本報告では「兵学」を使うことにした。

²武術・兵法に関する七種の書物。すなわち、孫子・呉子・六韜・司馬法・三略・尉繚子・李衛公問対をいう。(『日本国語大辞典』)

³Chaland Gérard, Anthologie mondiale de la stratégie (『ストラテジーの世界選集』)、XXIX-XXX 頁。

⁴『山鹿流兵法』、『日本兵法史』、『山鹿素行兵法学の史的研究』。

⁵藤野保『新訂幕藩体制史の研究』六七四頁。

⁶『年譜』とは、素行が著した日記に近い形式の書物である。報告者は使用したのは広瀬氏『山鹿素行全集 思想篇』の一五巻に所収されている。氏によれば、『年譜』は、素行が亡くなる最後の年に一気に清書され、二つの資料を基にして書かれたものである。四五歳までの『年譜』は、雑記や雑録等を、その後は、ほぼ毎日につけていた日記を基にした。原本は平戸山鹿家が所蔵していたが、現在は国文学研究資料館が所蔵している。原本はほとんど漢文で書かれているが、『山鹿素行全集 思想篇』に所収されている『年譜』は、広瀬氏により書き下された。

⁷広瀬豊『山鹿素行全集 思想篇』一五巻、書簡一。

⁸広瀬豊『山鹿素行全集 思想篇』一五巻、五四—三一三頁。

⁹同前、四八六頁

¹⁰家老は、滝川右京、滝川一右衛門、熊澤作右衛門と水野宇兵衛である。外三人は大河内彦七(二〇〇石)、熊谷雲八(三〇〇石)と熊澤右衛門八(五〇〇石)である。

¹¹広瀬豊『山鹿素行全集 思想篇』一五巻、書簡一〇—一三。

¹²富永好松『平戸藩の武芸教育—松浦静山を中心として—』。

¹³「素行文庫」所収の「城築縄張武功七ヶ条秘伝御口授扣」、「三重伝并六物」と起請文を参照。

¹⁴「素行文庫」所収の「武教全書 戦法聞書」と「三等録書留」を参照。

参考文献

石岡久夫・有馬成甫監修(一九六七年)『山鹿流兵法』(『日本兵法全集』五巻) 人物往来社

石岡久夫(一九八〇年)『山鹿素行兵法学の史的研究』玉川大学出版部

礎木村(一九八八年)『藩史大事典』第七巻 雄山閣
富永好松(一九八六年)『平戸藩の武芸教育—松浦静山を中心として—』長崎出版文化協会

長崎県史編集委員会編(一九七三年)『長崎県史—藩政編』吉川弘文館

広瀬豊(一九四一年)『山鹿素行全集 思想篇』一五巻 岩波書店

藤野保(一九七五年)『新訂幕藩体制史の研究』吉川弘文館